

平成 21 年 6 月 15 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18720227
 研究課題名（和文） 「里海・里湖」の民俗的資源管理にみる持続可能性の検証と今後のワイズユースへの応用
 研究課題名（英文） Study of Sustainability of “Satoumi” Folk Materials Management and Future Applications for Wise Use
 研究代表者
 佐野 静代（SANO SHIZUYO）
 滋賀大学・環境総合研究センター・准教授
 研究者番号：80273829

研究成果の概要：長年にわたる人間活動の影響を受けた潟湖など村落地先の「里湖」や「里海」について、近代化以前の資源管理システムの長期的動態を明らかにし、今後の水辺保全への方途を見出すことを試みた。「里湖」の事例として琵琶湖と八郎潟を、また「里海」としては沖縄・奄美のサンゴ礁沿岸を取り上げ、「二次的自然」としての実態を解明するとともに、村落による共同体的規制が資源利用の持続可能性へ与えた影響を比較検討した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,000,000	0	1,000,000
2007年度	800,000	0	800,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	210,000	2,710,000

研究分野：歴史地理学

科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学

キーワード：資源管理、景観変化、コモنز

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究史上の問題点

現在、陸域に続く浅い水域＝沿岸エコトーンの生態学的価値が見直され、その保全が求められている。この沿岸浅水域は長年にわたる人間活動の影響を受け、かつ共同体的な資源利用規制が成り立っていた、「二次的自然」ではないかと研究代表者は考える。したがってこのような「里海」「里湖」の保全を考えるためには、生物学的考察だけでなく人文科学的視点が欠かせないはずである。

「里湖」や「里海」は、入会林野と同様に民俗的資源管理を研究するのに最適のフィールドといえる。しかしながら、「里山」な

どの「山辺」の入会研究に比べると、日本の「水辺」の利用管理をめぐる歴史的研究は十分ではない。

現在、水辺はさらなる開発の危機に直面しており、地域で蓄積されてきた資源管理の「民俗知」は十分検討されないままに失われようとしている。その発掘検証は、研究者の急務である。

(2) 研究手法の有効性

近年、環境社会学で提示されている「伝統社会の持続可能な自然資源利用」＝「共生的なコモنز」像は、十分な歴史的検証を経たものではなく、「コモنز」研究に歴史的視点を導入し、かつて蓄積されてきた入会地研

究との接合をはかることが必要である。

そもそも資源利用の持続可能性を議論するためには、きわめて長期的な検証が不可欠である。聞き取り手法の時間遡及性を補完するものとして、古文書・絵図など各時代の史料を用いた歴史地理学的景観分析は、大きな有効性を発揮するはずである。

2. 研究の目的

本研究では、長年にわたる人間活動の影響を受けた潟湖など村落地先の「里湖」や「里海」について、そこに成り立っていた資源管理システムの実像を明らかにし、今後の水辺保全への方途を見出すことを試みる。具体的には、

(1)歴史地理学的手法によって各時代の植物相・生物相を復原するとともに、それらに向けられた人間活動の影響を景観変化の視点から検討する。

(2)文書調査と聞き取りの併用により、近代化以前の共同体的資源管理と資源利用の持続可能性を検証し、その長期的動態を明らかにする。

(3)上記をもとに、「人間を含んだ水辺の生態系の全体像」を解明し、在地の伝統的資源管理からワイズユースの実態を取り出すことで、今後の水辺の生態修復や保全策に活用することを旨とする。

3. 研究の方法

(1)「里湖」の典型例として、日本最大の潟湖である八郎潟沿岸村落を対象地域に設定し、琵琶湖岸での「里湖」の利用形態と比較検討する。「里海」の事例としては、沖縄・奄美のサンゴ礁沿岸村落を取り上げる。

(2)村落による共同体的規制が資源利用の持続可能性へ与えた影響を比較検証するために、それぞれのフィールドにおいて、以下の調査を実施する。

①生業とその権益に関する史料の調査

村方文書・県庁・公文書館所蔵行政文書の撮影と分析

②景観資料の分析と環境変化の解明

村絵図・地籍図の分析、旧版地形図・大縮尺地形図・空中写真を用いた景観復原

③生態学的データの分析

過去に行政・研究機関が実施した生物学的調査のデータ収集とその考察

④聞き取り調査

漁撈・海藻取り・ヨシ刈り・水鳥漁などの生業活動

資源利用をめぐる社会的規制の変化

(3)以上各項目に関する分析結果から、各時代における生業活動と景観の変化を照合し、水辺の資源利用と村落構造をめぐる長期的動態を取り出す。

4. 研究成果

(1)成果の概要

「里湖」の実像として琵琶湖岸の潟湖地形である内湖とともに、日本最大の潟湖であった八郎潟を取り上げ、中近世以来の資源利用と共同体的管理体制について比較検討を行った。さらに、従来「コモンズの海」の代表例とされてきた沖縄・奄美のサンゴ礁沿岸村落においても、水産資源の共同体的利用規制をめぐる実態調査を試みた。

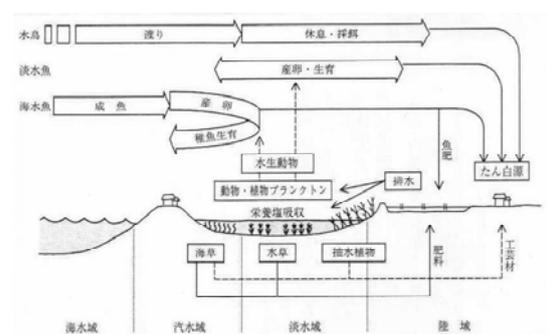
本研究では、水辺エコトーンにおいて行われる様々な生業活動について調査を行い、各時代の様相について復原したが、中でも特に八郎潟と琵琶湖岸内湖では、潟湖の開口部を抑える大型の魷型定置漁をめぐる管理体制と村落構造が大きな焦点となった。また沖縄と奄美諸島では、礁池の総有の典型例とされてきた石干見漁を取り上げ、共同体による水産資源の平等分配と資源管理の長期的動態について検証した。

「里湖」に関しては、各地の潟湖において、漁撈と農業が有機的に結びつき、底泥と水生



植物の肥料藻としての採取により栄養塩が陸上に回収される「人間を含めた水辺の生態系」の循環システムが明らかになった。このような「二次的自然」の実態を、地域ごとに成り立っている近世以来の多様な生業活動との関わりにおいて検証したが、その具体的な様相は、学術論文として発表した（項目5の〔雑誌論文〕④⑤⑦）。

本研究では、これら「里湖」の「人間を含



んだ水辺の生態系」を支えるものとして、村落による資源管理の共同体的規制と、その時代ごとの変遷を明らかにした。村落の社会構造と共有資源管理に関して特に注目されるのは、資源の利用規制に村の神社祭祀との関わりが濃厚にみられたことである。鮎や村のヨシ地は、村有とはいえ実際には村鎮守社の所有財産の形式を取る例が多い。このうちの多くが近世以来の由緒を持ち、なかには中世の供祭物にまで遡れるものさえある。この「神物」としての属性が、「コモンズ」の利用の公正性を保障していた側面も見受けられる。したがって、「二次的自然」としての循環的利用を支えていた村落の資源管理システムには、祭祀・宗教的規範も作用していた可能性が指摘される。

また、村落による資源利用は、その権益を享受するメンバー構成も含めて時代とともに大きく変化しており、「二次的自然」の利用と保全のシステムは決して固定的・静的なものではないことも明らかになった。「二次的自然」とは、人間活動とのバランスの変化によって容易に移り変わる「移ろいやすい自然」でもあり、村落による資源管理体制は、時代によって搾取的にも持続可能にも変化している。各時期の資源管理の実態を、地域に即して検証することがまずは不可欠であり、地道な掘り起こし作業を各地で蓄積していく必要がある。

以上の研究成果については、研究代表者がこれまで各地の水辺エコトーンを対象に行ってきた環境史に関する成果とあわせて、最終年度に単著として刊行した（項目5の〔図書〕①）。

(2) 研究成果の応用的意義

潟湖などの水辺が「二次的自然」であったと認識することは、今後の水辺保全の方向性を考えることにつながる。このようなタイプの水辺では、人の手を排して放置することではなく、適度な手入れが不可欠であることに気づかされるからである。

人がどの程度まで手を入れればよいのか、その「適度な関わり」のの基準となるのは、過去の水辺の生業活動と在地の民俗技術ではないかと考える。ヨシや水草の刈り取り時期や方法、その量などは、植生管理や生態修復の指標となり、またその利用・管理の規制について知ることは、今後の資源管理のための有用な情報となる。このように過去の検証は、「二次的自然」の自然再生の目標像にも直結するのである。

これら本研究の応用的意義については、論文・学術書の出版だけでなく、地域住民を対象とする水辺の環境保全関連の集会等で広く発表し、研究成果の地域への還元につとめた。折しも八郎潟が湖沼法の指定を受けたため、研究代表者は環境省・秋田県・NPO と協

力してそれを記念するシンポジウムにおいて、「民俗知」を今後の水辺再生に生かす方途について基調講演を行った。その討議の成果も環境省によって刊行され、本研究の成果は社会に向けて広く発信されている。

以上のように、水辺の「二次的自然」の解明と今後のワイズユースへの応用という本研究の目的については、「里湖」研究で大きな成果を上げることができたが、一方、「里海」としての海域の研究に関しては、課題が多く浮かび上がってきたのも事実である。特に沖縄・奄美の礁湖については、水産資源の共同体的管理慣行については検証できたものの、その生態系における人間活動の相対的位置づけの解明は、歴史地理学的手法だけでは限界があることもわかった。すなわち、開放系である海域の生態系の解明には、サンゴ礁の物質循環の分析や生態学的調査が不可欠であり、本研究で得た知見に加えて学際的なアプローチが必要となる。今後、他分野との協業により、この点について引き続き検討していきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計7件）

- ① 佐野静代「近世・近代史料による琵琶湖のERI発達史の再検討」、国立歴史民俗博物館研究報告、153号予定（受理済・印刷中）、査読有り
- ② 佐野静代「水辺の環境史と「二次的自然」をめぐって」、歴史科学、196号、32-41頁、2009年、査読無し
- ③ 佐野静代「「里湖」としての八郎潟一水辺の民俗文化の意義をめぐって一」、環境省東北地方環境事務所『八郎潟の再生を考える集い—八郎潟再生のために、今私たちに何ができるのか』、5-13頁、2008年、査読無し
- ④ 佐野静代「「里湖」研究の意義 —水辺の「二次的自然」をめぐって—」、滋賀大学環境総合研究センター研究年報、第5巻1号、30-37頁、2008年、査読無し
- ⑤ Shizuyo Sano “The Modern-day Significance of Traditional Cultures Making Use of Satellite Lakes around Lake Biwa”, Proceedings of the International Symposium on Wetland Restoration 2006 -Restoration and Wise Use of Wetlands-, pp116-119, 2006, 査読有り
- ⑥ 佐野静代「日本における環境史研究の展開とその課題—生業研究と景観研究を中心として—」、史林、第89巻5号、99-126頁、2006年、査読有り

- ⑦ 佐野静代「「里湖」としての八郎潟—近世～近代における生業活動とその生態系への影響—」、歴博、136号、15-19頁、2006年、査読無し

〔学会発表〕（計5件）

- ① 佐野静代「琵琶湖岸におけるヨシ帯の景観変化の長期的検証」、文部科学省特別研究推進「湖沼流域ガバナンス」プロジェクト年次レビュー会議、2009年3月5日、国際湖沼環境委員会
- ② 佐野静代「歴史からみた人と内湖とのかかわり—里湖としての内湖」、第6回湖岸生態系保全・修復研究会、2008年6月24日、滋賀県立琵琶湖環境科学研究センター
- ③ 佐野静代「水辺の「二次的自然」と景観変化の環境史」、第10回洛北史学会大会、2008年6月7日、京都府立大学文学部
- ④ 佐野静代「水辺の環境史と「二次的自然」をめぐって」、大阪歴史科学協議会、2008年3月15日、大淀コミュニティセンター
- ⑤ 佐野静代「水辺の伝統的生業システムとその今日的意義—「里湖」としての内湖をめぐって」、第4回沿岸域研究会、2008年2月29日、滋賀県立琵琶湖環境科学研究センター

〔図書〕（計1件）

- ① 佐野静代、吉川弘文館、『中近世の村落と水辺の環境史—景観・生業・資源管理』、2008年、全362頁

〔その他〕

報道関連情報

朝日新聞、2008年6月28日朝刊滋賀版掲載、「「里湖」と暮らし 未来探る」 研究代表者の「里湖」に関する研究成果発表

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐野 静代 (SANO SHIZUYO)
滋賀大学・環境総合研究センター・准教授
研究者番号：80273829

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：